

March 2010

大阪大学図書館報

vol. 43 no. 3 通巻 170号

発行所 大阪大学附属図書館 2010年3月1日発行

〒560-0043 豊中市待兼山町1の4

e-mail: kohowg@library.osaka-u.ac.jp



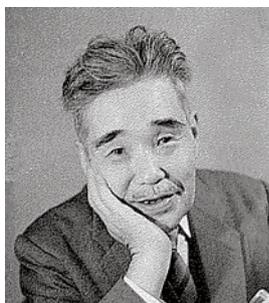
【特集】東洋学資料の宝庫～石濱文庫を知っていますか？

- 懐徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクション
——石濱文庫の再調査にむけて …P. 1
- 石濱文庫記念講演会 …P. 3
- 石濱文庫資料紹介 …P. 6
- ◆ 教員著作寄贈図書のご紹介 …P. 7
- ◆ News 図書館からのお知らせ …P. 7

【特集】東洋学資料の宝庫～石濱文庫を知っていますか？

懐徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクション
——石濱文庫の再調査にむけて

堤 一昭



石濱純太郎肖像

関西大学東西学術研究所編
『大阪の学問』より

石濱文庫とは、石濱純太郎（1888-1968）の旧蔵書を中心とした東洋学コレクションで、大阪大学外国学図書館に所蔵されている。4万冊以上にのぼる図書・雑誌に加えて、昨秋の記念講演会で紹介した拓本、さらに写真、研究過程を示すノートや書簡など1万点をはるかに超える資料があり、大阪大学全体でも懐徳堂文庫と並んで最大規模の特殊文庫である。

石濱純太郎は、明治21年（1888）に大阪の製薬会社の家に生まれ、小学校入学以前から漢学塾・泊園書院で藤澤南岳の教えを受けた。姉が南岳の次男、藤澤黄坡に嫁したこともあり、泊園書院との縁は終生続くことになる。市岡中学を経て検定で東大に入学し中国文学を学んだが、漢学のみにとどまらず新たな学問をめざした。まず京都の東洋学者たち、特に内藤湖南に師事し、開拓されつつあった甲骨文字・敦煌文献の研究に触れた。さらに大正11年（1922）に、創設当初の大阪外国語学校（阪大外国語学部の前身）に選科生として入学してモンゴル語を学んだ。この学校の教員であった浅井恵倫やニコライ・ネフスキーらと東洋学の研究グループ「静安学社」を昭和2年（1927）に結成し、重建懐徳堂を活動の場とした。ネフスキーとともに西夏文字の解読に取り組み、ウイグル

語文献の研究にも手を伸ばした。東洋言語学・歴史学へと学問の幅を拡げて、当時の東洋学の最先端分野の研究に携わったのである。国内外の研究者と交流して、資料収集は同時代のモンゴル、シベリア地域の動向に関わるものにまで及んでいった。

大阪の町人学者と自他共に任じた。大阪住吉の家は学問サロンの観があり、知識や資料を惜しみなく提供して研究を促したという。泊園書院のほか、大阪高等学校（阪大の前身校の一つ）・大阪外国語学校／大学・関西大学・龍谷大学・京都大学・天理大学に出講し、戦後は関大教授を務めた。昭和43年（1968）の没後、全蔵書・資料は遺族から大阪外国語大学に寄贈・購入され、十年の整理・編纂作業を経て『石濱文庫目録』が昭和54年（1979）に刊行された。なお、石濱が運営にも尽力した泊園書院の蔵書は、義兄の藤澤黄坡と石濱が教授であった縁で泊園文庫として関西大学に入り、石濱の師の内藤湖南の蔵書も、長男の内藤乾吉が教授を務めた縁で関西大学の蔵となっている（一部は杏雨書屋、京大人文科学研究所、大阪市立大学所蔵）。

大阪大学の懐徳堂文庫が、江戸時代の懐徳堂から大正・昭和時代の重建懐徳堂まで、大阪の漢学をはじめとする学問を知り得る貴重な資料として、現在も新たな研究・保存・公開がなされていることは周知のことである。石濱文庫はまさにこれに続くものとして、より注目されるべきである。石濱と縁のある泊園文庫と内藤文庫が関大に蔵され、平成19年（2007）の阪大と外大との統合により懐徳堂文庫と石濱文庫が阪大に蔵されたことで、大阪の漢学から東洋学への発展をたどり得る代表的なコレクションが奇しくも両大学で二分されることになったといえる。ちなみに内藤湖南は京都学派のイメージが強いが、教授就任以前、大阪朝日新聞の論説記者を務め、富永仲基・山片蟠桃ら懐徳堂の先学の事蹟を顕彰し、重建懐徳堂にも出講するなど、実は大阪とその学問との縁が深いのである。

石濱純太郎が資力を注ぎ、研究者たちとの交流を活かして収集した膨大な図書・資料には、現在では入手し得ないもの、劣化が心配されるもの、また現在の研究状況の中でこそ活かしようというものも数多い。だから、貴重だとして囲い込んで、遺志に背くことになりかねない。今後、単なる先学の回顧・顕彰にとどまらず、研究・保存・公開を見すえた再調査を行い、石濱の志を継いで新たな視点からの東洋学を大阪大学から興していくことが我々の責務といえないだろうか。拓本については、来年度に阪大総合学術博物館での展示をめざしている。関係の皆様のご教示、ご協力、ご支援をお願いしたい。

（つつみ・かずあき 文学研究科准教授）

藤澤南岳（ふじさわ・なんがく 1842-1920）幕末・明治期の儒学者。明治維新の際は高松藩のために奔走。明治になって大阪の泊園書院を父の東咳から継承し、数千の門人を教育。「通天閣」は南岳の命名による。

内藤湖南（ないとう・こなん 1866-1934）東洋学の京都学派の創始者の一人。京都帝大教授。中国史の時代区分をはじめ中国史、日本文化史に多くの業績を残す。全集がある。

浅井恵倫（あさい・えりん 1895-1969）言語学者。東南アジアの言語の研究を行う。1924年大阪外国語学校馬来語部（後のインドネシア語学科）講師、次いで教授。後、台北帝大助教授、金沢大、南山大教授となった。

ニコライ・ネフスキー（Nikolai Aleksandrovich Nevskii 1892-1937）日本学者、西夏（中国西域）学者。大阪外国語学校でロシア語教師として勤務するかたわら、日本各地を調査し、日本民俗に関する論文を発表。ソビエト連邦に帰国後も大学で日本研究、西夏語研究を行ったが、1937年スパイ容疑で逮捕、殺された。

重建懐徳堂 懐徳堂は1869年に閉校したが、西村天因らの尽力により、1916年に再建された。専門家の講演などが行われ、市民大学の観を成した。1949年、蔵書が大阪大学へ移管された。

石濱文庫記念講演会

石濱文庫記念講演会は、外国学図書館が「大阪外国語大学附属図書館」であった時代に13回にわたり開催されました。

平成21年(2009)は『石濱文庫目録』作成から30年の節目であり、また洋書3,000冊の目録データベース入力が国立情報学研究所の「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」に採用され、年度内に作業完了する見込みです。

この節目の年を記念して、箕面市立図書館の後援で、11月12日に講演会を外国学図書館AVホールで開催しました。学外の方も含め120名の方が聴講しました。

一橋大学の田中克彦名誉教授、本学文学研究科の堤一昭准教授の講演の要旨を紹介します。



コレクション全体に反映された石濱の学問への願い -- 田中克彦先生

講演 石濱文庫が語る世界



たなか かつひこ
一橋大学名誉教授
(言語学、モンゴル学)

「大阪には石濱というすごい学者がいる」と、一橋大学の上原専禄先生から聞いたのが石濱純太郎の名を聞いた最初だった。一般の人民が自分の関心に従って知識と教養を広げて行く大阪の「町人学者」の伝統の流れを汲む人だという印象を持った。

その後、大阪外国語大学に石濱純太郎の蔵書が移されたと聞いて、一度行こうと思っていた。初めて行った時がいつかは忘れたが、その時吸い寄せられたのは学術の中心から離れた紙きれのようなものだった。

それは、イディッシュ語で書かれた『ビロビジャーネル シュテルン(ビロビジャンの星)』、弁当箱も包めないような粗悪なタブロイド版の新聞で、40枚ぐらいだった。

私がイディッシュ語と出会ったのは、1968年である。ハバロフスクの郵便局で出会ったイディッシュ語を話す男にドイツ語で話しかけ、ウォッカを飲んで意気投合し、もらったのが「ビロビジャーネル シュテルン」だった。当時のロ

シアは地方紙を国外に持ち出すことを禁じていた。そのため、ポケットにねじこんで神経を使って日本に持ち帰ったのである。

石濱文庫のものは1934, 35年ごろの日付だったと記憶しているが、何故イディッシュ語の新聞を石濱純太郎が後生大事に持っていたのだろうか。

日本が満洲国を作った時に、満洲国に接するアムール川流域に住んでいた朝鮮人がロシアからスパイ扱いをされて、中央アジアに強制移住させられた。そしてそこにユダヤ人が連れて来られて「ビロビジャンユダヤ人自治州」が生まれたのが1934年だったのである。それに関係するかもしれない。とにかく、西夏語や契丹語の解読に関心がある人がそういう広い世界を自分の中に作っているということにびっくりした。

(次ページに続く)

上原専禄(うえはら・せんろく 1899-1975) 歴史学者。ヨーロッパ中世史学。東京商科大学(現一橋大学)学長を歴任。

イディッシュ語(Yiddish) ドイツ語を基層とし、ヘブライ語・スラブ語などが混じり合って出来た融合語。文字はヘブライ文字を使用する。現在はイスラエル・南北アメリカ・旧ソ連で使われる。使用者は300~400万人と推定される。

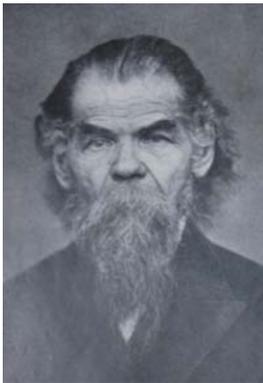
ビロビジャーネルシュテルン(der birobidzhaner shtern) 1930年代にビロビジャンユダヤ人自治州で創刊。現在はロシア語版とイディッシュ語版が出ている。

西夏語・契丹語 10~13世紀に東アジアに作られた国で使用された言語(p. 5注記参照)。

また、石濱文庫には『自由シベリア』という雑誌もある。これはシベリア独立運動党がプラハに亡命した際に出した政治学術雑誌である。表紙はシベリア独立のシンボルマークが書いてある。中を開くとポターニンという人の写真が出ている。



「自由シベリア」表紙



ポターニン
「自由シベリア」
1巻所収

ポターニンは『西北モンゴル誌』を著すなど民族学者として有名であるが、実はシベリア独立運動に関わった人間である。シベリアはシベリアの倫理を持って独立すべきという信念の下、1865年にシベリア独立運動のグループを立ち上げた。そしてその罪を問われて5年間の流刑に処せられた。

ポターニンはその後、モンゴルやシベリアの研究をしたが、これはシベリア土着の人びとの生活権利を守る運動と ethnography (民族誌) の研究が密接に結びついていたものである。そもそも学問というのは、強力な生活の要求や政治的背景に基づいて進んできたということを示すいい例だと思う。こういう本が入っているということが実に不思議なことだ。

石濱文庫にある1つ1つの文献の評価もさることながら、石濱純太郎がどんな願いを持って自分の蔵書を形成したかが重要だと思う。

石濱純太郎は大学の外にしながら、研究者に刺激を与えるような文献を集めた。どこに関心の糸が伸びていくかわからないような広がりを持っていたことが、蔵書を通じて感じられる。この本が役に立つとか俗書であるといったことではなく、コレクション全体に石濱純太郎という一人の生涯をかけた学問への願いや憧れが反映されている。学問が細分化され、本来の精神をなくしている現在、そういう時代がかつてあったということを知ってほしい。

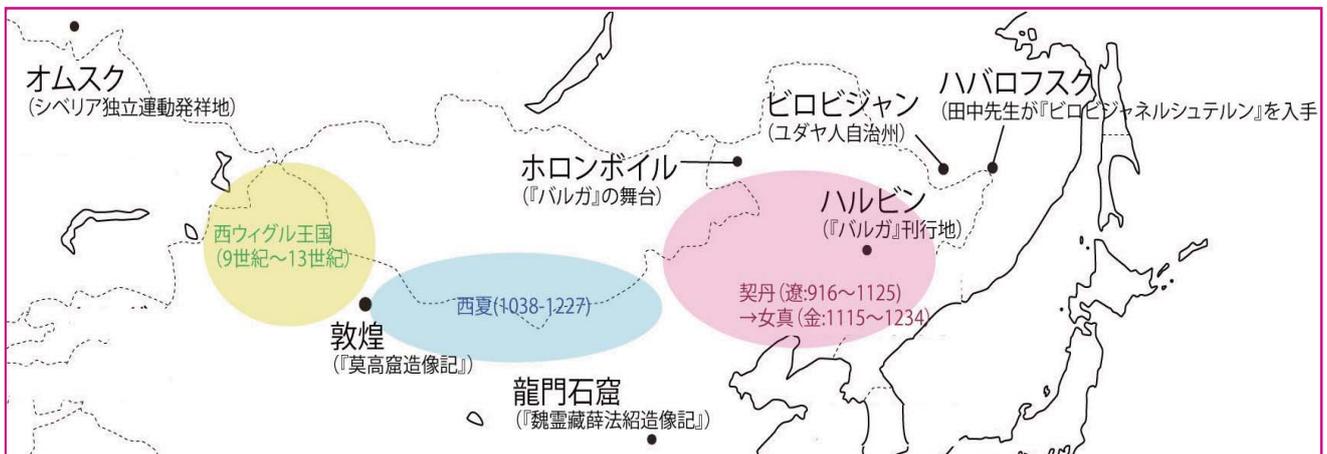
私は、著書『ノモンハン戦争』(岩波新書, 2009)で『バルガ』という資料を紹介した。今までは決まりきった資料のみを使っていたが、石濱文庫の宣伝をしたかった。石濱文庫の価値を知らなければ、日本の学問は薄っぺらいものになってしまう。また、この資料は『石濱文庫目録』にも載っていない。見かけはパンフレットみたいなもので、目録編成時に漏れてしまったのだろう。これを機会に復刻して世界の研究機関に配れば、石濱文庫が世に知られるきっかけになるかもしれない。



「バルガ」表紙

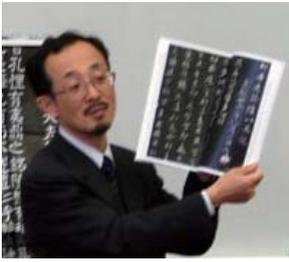
自由シベリア (Вольная Сибирь) 1926-28年刊行 全4巻のうち、石濱文庫には1, 3, 4巻がある。
 ポターニン (Grigoriy Nikolaevich Potanin 1835-1920) 探検家 民族学者 西シベリアのオムスクでシベリア独立運動を起こす。「最初のシベリア市民」という称号を贈られる。
 バルガ (Balga) A・バラノフ著 1912年ハルビンでロシア国境警備隊により刊行 ホロンボイルに住むバルガ族について書かれたもの。バルガ族はモンゴル諸族の中でも特に独立の気風が強く、辛亥革命時代のモンゴル諸族独立運動の中でも指導的な立場を果たした。

石濱文庫記念講演要旨 (p3-5), 資料紹介 (p. 6) 関連地図



場所はおおよその位置です。

講演 石濱文庫の拓本コレクション —漢学から東洋学へ—



つつみ かずあき
大阪大学文学研究科准教授

石濱文庫は東洋学図書のコレクションとして紹介されるが、拓本、その他に写真、研究過程を示すノート、書簡などの研究資料も多数含まれる。中国や日本ほかの漢字文化圏では、拓本は書道の鑑賞・研究、また歴史研究のための資料としての2つの性格を持っている。特にもとの石碑などから採った拓本は「原拓（げんたく）」と呼ばれ、おみやげやお手本などの複製品とは区別されて、それ自体が一つの文化財である。青銅器や石碑などの石刻から歴史を研究する学問は、「金石学」という。現在は、原石、拓本、原石の写真、拓本の写真の四者を併用して研究するのが常である。交通手段が発展して、現地に行けるようになって、拓本は資料として重要である。もともとの石を見ても見えないが、拓本にとると字が見えるという不思議なことがある。拓本というものは特有の価値があると思っしてほしい。

私は2004年から拓本の予備的な調査を開始した。拓本にはそれが何かを示すラベルはついていない。だから、石濱先生に一点一点これは何なのかとテストをされているような気持ちになった。とはいえ、『石濱文庫目録』編纂時の1970年代に比べ、現在は目録・図録が洪水のようにあるし、画像データベースが公開されるなど、調査・研究環境が劇的に変化している。おおよそどんなものがどれだけあるのか把握することができたが、本格的な調査・研究はこれからである。展示までを見越して、複数の専門分野の研究者との共同作業が必要となる。次のスタートラインに立っているような段階である。

石濱文庫の拓本は約1300枚あり、そのほとんどが石刻からの「原拓」である。一個人のコレクションであるため、他に比べ規模はそれほど大きくないが、これだけのものを収集することは今となっては不可能である。文化財なので中国政府は「原拓」をまず国外に持ち出ささせてくれないし、もとの石が失われている場合もあるからである。

石濱先生が実際に現地に出向いて入手したものではなく、幅広い交友関係から入手・購入して蓄積されていったものと考えられる。龍門石窟の造像記が三分の二をしめるが、このほかにも多様なものがある。

これからは調査・研究に加えてよりよい保管・公開が求められる。「石刻学」とでも言うべき学問を大阪大学で継承・発展させていくために利用することが必要である。

—以降、11種類に大別された拓本コレクションの説明があったが、ここでは2点のみ紹介する。詳細は堤一昭「石濱文庫拓本資料調査の概要-2006年度前半まで-」『大阪外国語大学論集』35 参照



○造像記(861枚)

石濱文庫のものは、ほぼ全て中国河南省洛陽南郊の龍門石窟のもの。5世紀末(北魏～唐時代)。壁面に浮き彫りにされた仏像のかたわらに、その由来・祈願者などを刻んだもの。

【魏靈藏薛法紹造像記】(ぎれいぞう せつほうしょう ぞうぞうき)
書道の世界で最高傑作と名高い「龍門四品」の一つ。古陽洞の北壁上段の釈迦像の右側に刻された碑の形をした銘文で、魏靈藏と薛法紹の二人が国運と一門の反映、成仏を祈願したものである。

○非漢字刻文のものを含む石刻群

18世紀末から東洋学の世界では、未解読文字の解読が競われていた。石濱もニコライ・ネフスキーとともに西夏文字の解読を志した。内訳は契丹5枚、西夏3枚、女真8枚、モンゴル24枚、満洲9枚。

*契丹、女真、西夏文字は10～13世紀に東アジアに作られた国(p. 4地図参照)で利用された言葉。漢字に似ている。西夏文字は石濱と親交を結んだ西田龍雄(1928-)が後にほぼ解読。契丹文字と女真文字は完全には解読されていない。



契丹文字が鑄出された鏡

石濱文庫資料紹介

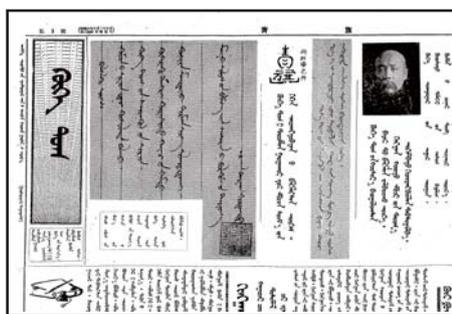
石濱文庫の一番の特徴は、モンゴル語・満洲語・西夏語等に関する資料が多く収められていることです。この中には非常に貴重なものが含まれています。文庫の半分は2万冊にのぼる漢籍（金石学・音韻学などが特に充実）ですが、「大正8年から昭和13年頃までの間に丸善書店を通じて輸入された東洋学関係のものは、ほとんど買った」と噂のある洋書、欧米の東洋学者から寄贈された論文抜刷、石濱が強い関心を寄せていた近世大阪の文化史関係資料などにも興味深いものが多くみられます。

【莫高窟（ばっこうくつ）造像記 拓本】 モンゴル（元）時代・至正八年

敦煌の郊外に、莫高窟と呼ばれる石窟群があり、4世紀から14世紀にわたる仏像と壁画、多言語にわたる「敦煌文献」により知られている。モンゴル時代、チンギス・カンの第二子チャガタイの子孫の一系統がこの地を根拠地としていた。本品は、その第二代西寧王スレイマンが莫高窟の一窟を改修した際の記念碑の拓本。上部に大きく「莫高窟」と漢字で記し、その下は観音菩薩を取り囲むように、上二行はサンスクリット・チベット、そして右から漢・西夏・パспа・ウイグルと、合計六体の文字で刻まれる。

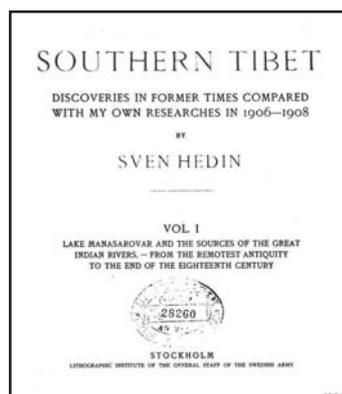


パспа文字：モンゴル（元）時代のチベット人パспа（八思巴）が、クビライ・カアン
の命を受けて作った文字。1269年に「蒙古新字」として詔勅により公布された。



【青旗（せいぎ）】 新京（満洲国）1941-45

太平洋戦争時に満洲国で刊行されたモンゴル語の新聞。日本人によるモンゴル人への啓蒙活動の色合いが強い。文化大革命などの影響もあって、現在、中国やモンゴルで見つけることは難しい。石濱文庫のものは欠号がほとんどないため、モンゴルの研究者からも注目されている。この他モンゴル語新聞『奉天蒙文報』（1918-20）『蒙古新報』（1937-40）『児童新聞』（1939-40）なども所蔵している。



【Southern Tibet】 ストックホルム 1916-22年刊

ヘディン (Sven Anders Hedin:1865-1952) 著。ヘディンはスウェーデンの地理学者・探検家。中央アジア・チベット・新疆地域を調査。楼蘭遺跡の発見などでも有名。石濱文庫にはヘディンの著をはじめ、敦煌文献の調査・収集で有名な英仏のスタイン（1862-1943）、ペリオ（1878-1945）らが20世紀初頭に行った中央アジア学術探検隊の報告書の類が漏れなく集められている。

【街能噂（ちまたのうわさ）】 4巻1冊 大阪ほか 1835（天保6）年刊

滑稽本。撰者の平亭銀鷄（へいていぎんけい、別名畑銀雞）は江戸の人物で、大阪に数年間滞在して見聞したことについて、江戸との違いを比較して記述している。特に第4巻には挿絵があり、視覚的に両者の違いを見ることができる。



石濱文庫資料の閲覧を希望される方は、一週間前までに外国学図書館までご連絡ください。

電話：072-730-5126 E-mail: ml-cir @ library. osaka-u. ac. jp

・・・教員著作寄贈図書のご紹介 2009.Dec. ～ 2010. Jan.・・・

寄贈者氏名（所属）※敬称略	書名
内田憲男（名誉教授）	ロレンスの贈り物：新たな「生」の探求
江尻宏泰（名誉教授）	ビックリするほど素粒子がわかる本：クォークはどうして姿を見せないのか?: ニュートリノはなぜ地球を突き抜けるのか?(サイエンス・アイ新書；SIS-147)
大高順雄（名誉教授）	ロマン語：新ラテン語の生成と進化(学術叢書)
西村成雄（名誉教授）	党と国家：政治体制の軌跡(叢書中国的問題群；1)
出原隆俊（文）	異説・日本近代文学
大野陽子（文）	ヴァラッロのサクロ・モンテ：北イタリアの巡礼地の生成と変貌
染田秀藤（人間科学）	Miradas al Tahuantinsuyo：aproximaciones de peruanistas japoneses al imperio de los Incas
中辻啓二（工）	大阪湾：環境の変遷と創造
岸田文隆（言語文化）	朝鮮半島のことばと社会：油谷幸利先生還暦記念論文集
藤田一郎（生命機能）	脳ブームの迷信(家族で読める family book series；017. たちまちわかる最新時事解説)



Web of Science 講習会を開催

Web of Science を編集しているトムソン・ロイター社からプロのトレーナーを招き、総合図書館で12月15日に標記講習会をおこないました。今回は「オープンな空間で講師との距離が近い講習会」となることを意図し、場所をラーニング・コモンズに設定しました。参加人数は9名でしたが、個々の参加者のニーズに応じた講習を受けることができ、参加者の方々の満足度は高いという結果がでています。また、通りすがりに足を止めて聞いている利用者も数名おり、ラーニング・コモンズの特徴を生かした講習会となりました。



Reaxys（リアクシス）講習会を開催

昨年11月に導入した化学のファクトデータベース「Reaxys」講習会を1月13日に豊中地区と吹田地区でおこないました。Reaxysでは、有機化合物、無機化合物、有機金属媒体の物性値や分析値、反応情報などが検索できます。

プロのインストラクターによる実習付きの講習は大変好評で、両地区あわせて164名の参加者がありました。



「返却期限を守ろう」キャンペーン

総合図書館で標記キャンペーンをおこなっています。図書の返却が遅くなることは、その本を借りたいと思っている人の利用を妨げることとなります。図書館では、特に卒業・修了予定の方に対して注意を呼びかけています。

返却期限日の確認方法は次のとおりです。また、メインカウンターでも問合せに対応しています。

- 方法1・自動貸出機のレシートを確認する。
- 方法2・デートスリップを確認する。
- 方法3・「Webサービス」を利用する。「Webサービス」については次のURLをご覧ください。
http://opac.library.osaka-u.ac.jp/req/userguide_basic.htm



クリスマスコンサート「ギターが奏でる Xmas」開催

標記コンサートを12月18日の夕方から総合図書館6階図書館ホールでおこないました。

第4回目となる今回は、プロのフラメンコ・ギタリストである中島桃子氏とフルーティスト川端裕美氏を迎え、クラシックギターと異なる、より華やかな音色をもったフラメンコ・ギターと、木製フルートの暖かみのある音色が奏でるフラメンコの曲やクリスマス・ソングの演奏を一時間にわたって楽しみました。

当日は、厳しい冷え込みにもかかわらず近隣の一般市民22名以上を含む105名の参加者があり、「やさしい音色や激しい音やバラエティに富んでいて楽しく聴きました」「心地よい時をすごせました」といった感想が多く寄せられました。



サイエンスカフェ第2弾「10年後の彼／彼女」

理工学図書館ラーニング・コモンズで第2回目となるサイエンスカフェを12月21日におこないました。今回は高齢社会に関する学問である「老年学」をテーマとしたワークショップで、4名1組のグループになり、1名が未来を予想される人(インフォーマント)となり、他の3名がインフォーマントに15年後、25年後、35年後の仕事、結婚、住んでいる場所などについて質問し、インフォーマントの未来を予測する中から、インフォーマントの持つセルフイメージ、将来への夢や期待を浮かび上がらせるという興味深い企画でした。



シンポジウム：遺跡資料リポジトリを開催

総合図書館で標記シンポジウムを11月27日におこないました。本シンポジウムは、島根大学が中心となって進めている「遺跡資料リポジトリの構築」プロジェクトが主催し、デジタルリポジトリ連合が後援しました。大阪大学もこのプロジェクトに連携機関として加わっています。

シンポジウムでは、文化庁記念物課の禰亘田主任文化財調査官の基調講演、文学研究科福永伸哉教授の講演の後、講演2件、事例報告5件、デモンストレーション1件、パネルディスカッションがおこなわれました。参加者数は24機関から55名でした。大学図書館関係者ばかりではなく、地方公共団体の埋蔵文化財関係者の参加も多数あり、大学という枠を越えた大きな広がりを感じられたシンポジウムでした。遺跡資料リポジトリ関係の情報は次のURLをご覧ください。

<http://rarcom.lib.shimane-u.ac.jp/>



「写真フィルムの保存について」研修会を開催

標記研修会を総合図書館で12月22日に開催し、学内の図書館等職員27名のほか、近畿地区の大学・公共図書館・資料館の職員、教員等から40名、計67名の参加がありました。

講師を(株)堀内カラー・アーカイブサポートセンターにお願いし「写真フィルムの保存」「資料のデジタル化」の講演がありました。講演では、フィルムの構造・劣化原因・劣化対策、フィルムに記録された情報を保存するためのデジタル化のポイントが示されました。

マイクロフィルムが加水分解する「ビネガーシンドローム」は、附属図書館でも発生しており、その保全作業に取り組んでいます。



マイクロフィルム関連機材